



東儀氏が「冷めない熱を持ち続けている」と話す時計だが、スイスへの旅支度でまず考えたのは、どの時計をしていくかだった。

「オーデマ・ピゲの工房を訪問できると聞いて、はたと気がついたんです。ブレゲもショパールもジャケ・ドローも持っているのに、オーデマ・ピゲは持っていないことに。いっそのこと腕時計はしないで行こうかと思いました(笑)」

**時計作りの歴史を
わかりやすく展示**



(右)身振り手振りで説明する、館長のヴァンサン・ジャントン氏。(左上)ヴァレ・ドゥ・ジュールの時計作りの工程や歴史を伝える時計博物館[ESPACE HORLOGER]。(左中)19世紀初めの時計職人の工房を再現。(左下)タッチパネルで見やすく表示している。

[DATA] ESPACE HORLOGER @Grand-Rue2-1347 Le Sentier www.espacehorloger.ch

**東儀氏のもう一つの趣味。
古い城内で歴史的名車を堪能**

東儀氏が時計と共に好きなヴィンテージカーを展示したミュージアム。(左)城内には、英国のチャールズ首相が乗っていたという黒のオースチンやグレン・ガルボが愛用していた白いロールスロイスなどを展示。(右)ブルゴニー軍に勝利したグランソンの戦いで知られる、グランソン城は、ヌーシャテル湖畔にある古い城。

[DATA] FONDATION DU CHÂTEAU DE GRANDSON @Place du Château 1422 Grandson www.chateau-grandson.ch



**1875年ヴァレ・ドゥ・ジュールで
始まったオーデマ・ピゲの歴史**



ジュール＝ルイ・オーデマとエドワード＝オーギュスト・ピゲによって設立。当時から続く家族経営で、技術革新と丁寧なケアを提供する。*工房は通常非公開

**新製品開発だけではない
一流ブランドの心意気**



(左)100年以上前の部品が収められた箱がぎっしり詰まった収納棚。変色した箱が、ブランドの丁寧な時計作りの歴史を伝える。(右)0.06mmのネジでさえも再現して修理。その際には仕様書を記入する。また部品は必ず2つ製作し、1つは次の修理依頼に備えて保管するとか。

**文字盤のプレス作業に
東儀氏がチャレンジ**



(左)文字盤には、東儀さんの「T」の文字が。(右)高級時計のブリッジと地板の装飾に使われる文字盤に細かいサークル模様を重ねる、「ヘルラージュ」と呼ばれるプレス作業を行う東儀氏。眼鏡をかけ、ぐっと真剣な表情に。

■ 今回の東儀秀樹氏スイス旅についてもっと詳しく知りたい方は
スイス政府観光局内特設ページ
www.myswiss.jp にアクセス!

旅立つ東儀氏が腕に巻いたのは、ジャガー・ルクルト。「これなら時計に無頓着な人間ではないことが伝わると考えたんです」

オーデマ・ピゲの本社があるのは、スイスの高級時計作りの中心地、ヴァレ・ドゥ・ジュール。フランスとの国境から近いスイスの西南に位置するジュラ山麓の小さな谷に、ジャガー・ルクルトやブレゲ、ブランパンなども本社を構える。東儀さんはブランドの歴史について説明を受けた後、工房へと足を進めた。窓から自然光がさんさんと降り注ぐ部屋には、白衣をまとい黙々と作業する人たちの姿があった。最上階の部屋では、やってみないか?と声がかかる。時計職人のフランシスコさんは真剣なまなざしで作業台に向かう東儀氏に穏やかに語りかけた。

「私の父もオーデマ・ピゲの時計職人でした。私も勤続25年で、会社から腕時計をもらったんですよ」

その表情はじつに誇らしげだ。この工房内では、一切の製品撮影が禁じられる。発表前の製品か、あるいは修理に出された個人所有の時計だからだ。

「100年前の製品も私たちは修理します。だから100年前の機械が置いてあるんですよ」と話す時計職人のアンジェロ氏。最後にふたりと古い部品が保管された収納庫をバックに記念撮影。気負いのない笑顔が心地いい。

「仕事への誇りを楽しんでいる人た

in Switzerland
**時計作りに従事する
ちの心に宿った“誇り”の正体**



入った白衣を着て作業しやすいよう台は胸のあたりを飾る人も多い



部品の収納庫の前で、アンジェロ氏(左)、フランシスコ氏(右)と記念撮影。彼らに限らず、「父も時計職人だった」と語る職人は多い。「誇りも受け継いでいるのではよね」と東儀氏。